義太夫

義太夫協会会報
第40号
昭和62年 9月24日
社団法人　義太夫協会発行
〒104　東京都中央区銀座
6−18−2 新橋演舞場 B2
TEL　（541）5471

教師の為の講習会の感想

義太夫協会会長　田辺秀雄

本協会では年に六回、教師の為の義太夫節講習会というものを開催している。これは文化庁の助成金を得て行っているもので、都内又は近くの中・高校の教師に特別の低廉な料金で、解説などをつけ義太夫節の鑑賞を眼目とし、学校教育の面から日本の誇るべき音楽である義太夫節の普及を図ろうというわけである。その反響は良いようで、毎回本牧亭が満員となるほど多くの先生方が見えられ、常連も出来たり、また協会の他の催し物にも出席されたり、義太夫教室に参加しようという人もあるという。その効果があがっているということは大変喜ばしいことで、何と言っても現在邦楽が今の若い世代から遠くなっているのは、永い間の学校の音楽教育の在り方でこれらに触れられていないことから始まっていると言われるほどであるから、その指導される先生方が幾分でもこうして積極的に邦楽、中でも語り物音楽の代表的な義太夫節に関心を持ち、それを理解するということは我々にとって重要な問題である。

さてこれに参加する先生方であるが、協会から各学校宛てに送付する案内状の宛名が、校長の他、国語、音楽、視聴覚教育担当教員殿となっている関係か、国語の教師が圧倒的に多いという。それはそれで結構なことなのだが、音楽の教師がいつも少ないということは大変残念である。

御承知のように浄瑠璃というものは文学的要素が非常に濃い。劇的なその脚本にしても大近松を始め、紀海音、竹田出雲、並木宗輔その他、文豪とも言われる大作家が書き、江戸時代の文学史に高く輝く作品が沢山ある。そうしたことで国語の教材にも取上げられるほどで、この方面から音楽である義太夫節に入って行くということも確かに重要な方法ではあるが、それは得てして詞章の問題に止まり易く、それをどう表現するかもっと直接的に感覚に訴える方法は義太夫節そのものへの理解で、これは音楽教師にもっと頑張って欲しいところである。

話が少し変わるが、先日ＮＨＫＴＶの或番組で、東京浅草の白鷗高校のクラブ活動で三味線を大勢の生徒が合奏しているのを見た。その男女生徒の演奏は中々見事で、しかも皆が嬉々としてまことに楽しそうにやっているのが印象に残った。これは同校の音楽教師の野口啓吉先生の並々ならぬ指導によるものであり、他にも杉並の中学校では茅原芳男という音楽の先生は永い間箏と三味線をクラブ活動で真剣に指導され私も二回ほどその発表を聴いたが、遂に最近学校の方は退職された由である。また姫路の小学校の音楽教師大原啓司氏はやはり三味線の指導に大変苦労されている。その他にも何人かの人が各地で活躍して居られる。

（次頁へ）

（前頁より）

文部省の学習指導要領では、一時邦楽の鑑賞教育を取上げ、三十三間堂木やりの段などがあったが、それはそれなりに効果はあったと思う。だが最近義務教育など全体の見直しがあってこれは消えてしまった。だから普通の音楽の時間は洋楽の教材で時間一杯となってしまっていて、このように邦楽を取入れるには早朝や放課後などのクラブ活動を利用しなければならない。その上集団的に指導する為には沢山の楽器が必要となり、その予算をとるのが大変である。

だから前に先生方の並々ならぬ苦労と書いたのはそのことである。校長や教頭、またＰＴＡの人達、そして自治体に属していればその教育委員会の理解と援助が必要である。

私はそれらの献身的な教師達の活動を見ていて、若い生徒達がいずれもまことに喜んで邦楽を受入れているのを知っている。今の若い人たちが邦楽に関心を持てないというのは一概に言える言葉ではない。要は彼らが邦楽を全く知らないからで、これを知らしめるということが必要だと私は言いたい。

先日の教師の為の三味線講習も多くの受講者を集めた。今年の義太夫教室も賑やかである。私は義太夫の楽しさ、その高い意義を知って下ださった先生方が、それを教室でどう生かして下ださるかそれを知りたいと思う。今後は学校への出張演奏、生徒の本牧亭での鑑賞、音楽教師を育てあげる各音楽大学などへの参加など考えられるのではないか。

『教師のための義太夫講習会』
『アンケートから』

かつて「教師のための義太夫講習会」に参加されたことのある先生方に『**三味線を弾いてみませんか**』と呼びかけたところ、24名の参加があり、全く初心の先生方が一晩で何とかオクリを弾くことができました。三味線が二人に一丁で御迷惑をおかけしましたが、逆に初対面の先生同士が譲り合ったり、どうしても膝の上に固定しない三味線を隣りで支えたり、首をかしげて相談し合ったりという和気あいあいとした受講風景が展開されました。今度は『一緒に語ってみませんか』とお誘いする予定です。

（62年5月9日実施）

＊　＊

○全く初めてでしたので、とても緊張しました。とても貴重な体験をさせて頂き、うれしく思っております。日頃、洋楽ばかりに接していますのでこれを機会にもっと日本の伝統的な音楽にふれたいと思いました。

○演者の立場（？）に少しでも近づけ（？）たのは新鮮な感動でした。三味線の響が直接胸郭に反響するようで、いつまでも耳に残る音になると思います。

○不安な気持での参加でしたが懇切なわかりやすい御指導でありがたかったです。めったにチャンスのない良い体験をさせて頂きました。三味線が人数分あれば言うことなしでした。

○右ひじが滑らないようにすると膝から滑る。右手に気をとられると天柱が下がる。知らない間にかかえこんでいる。あちらを立てればこちらが立たずで大変苦労した。しかし非常に興味深い講習でした。ごくたまにいい音色が出るとうれしかった。

○右手がほんとうに痛かったです。初めて手にしてみて非常にむずかしいのだと実感すると共に改めて興味がわきました。

○太棹のあと少し細棹を持たせて頂き、とても違いがわかった。太棹はごっつい感じです。それに正座してやるのは大変でした。またもう少しやってみたいです。

○文楽を聞く楽しみがふえた。のめり込みそうな気がします。

○かんげき！です。新鮮な感じ、言葉で表わせないうれしさです。又来ます。

○重さに驚きました。ムダな力が入るらしく左腕が疲れました。右膝の置く位置が絶えず動くので気持がそちらへそれてしまい、音に耳を澄ますどころではありませんでしたが、とても楽しかったです。

○厚味のあるバチを初めて手にし、その重さと痛さを実感いたしました。本物を知ることができてとても楽しく素晴しい企画でした。自分で奏するとその難しさ、面白さがわかるものですね。ふだん伺っている音色にこれからは陰の精進も込めて響いてくることでしょう。またこのような企画を期待しております。

故 鶴澤重造師

重造さんへ感謝

名誉会長　吉川英史

鶴澤重造さんは、文楽の三味線の重鎮で、文楽に貢献されたことは無論ですが、わが義太夫協会へのご尽力も多大でした。役職としては、私が会長を勤めていた間の十六年間、監事という要職をお願い致しました。私が一身上の都合で会長を辞したのと時を同じうして、ご病気のために、協会の役職を辞退されたのでした。

しかし、重造さんが協会に貢献されたのは、監事としての仕事だけではありませんでした。義太夫教室の講師としての講義（芸話）、協会幹部の芸の指導、新曲の作曲など、多方面でありました。特に、義太夫節三百年を記念して、義太夫協会が水上勉氏に台本を、重造さんに作曲を依嘱しました『蜆川』は、協会にとっても、私にとっても、意義深い作品であります。重造さんを偲ぶ催しがある場合には、『蜆川』の全曲または一部を演奏して頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。

重造さんは、芸術大学教授にふさわしい人でした。教科書的な芸の人でした。ピアノのクロイッァー教授のような人でした。「瓜の蔓には茄子はならぬ」と申しますが、重造さんの令息は東大の教授になられた学者です。

その令息を大学に入れる学費のため、重造さんは文楽から脱退してアメリカに渡られ、邦人相手の義太夫節の師匠家業に転向されたのでした。そのために、後年文楽に復帰された時の席次が下がったのは、お気の毒なことでした。

ところで、戦時中、重造さんの紹介で、井野暁美という娘さんが、研究助手という名目で私の家に毎日通われました。井野さんが通勤定期が買えるように、「吉川邦楽研究室」という名前を付けたかと思います。

この井野さんが、重造さんの令息の夫人になられたことを知ったのは、四十数年後の一昨年秋、重造さんの米寿祝賀会の当日でした。しかも、暁美夫人は既に逝去されたことを、その時立ち話しでご夫君から聞いたのですが、めでたい日のこととて、涙もこぼせない複雑な気持に打ちのめされました。

私の書斉には、「塚本虚堂、筑紫楽の内容に就て」と、表紙に書いた大学ノートが四冊あります。それは昭和十年度の雑誌『三曲』に塚本虚堂氏が連載された筑紫流箏曲に関する貴重な資料で、井野さんは丹念にペンで書き写して下さったばかりでなく、全文に対する人名・曲名の索引まで作ってもらいました。筑紫流箏曲に関する索引は、今もこれ以外にない貴重なものとして、わが家の家宝の一つになっています。

現在の私としては、重造さんを偲ぶと共に、暁美さんも偲ぶ心で一杯です。お二人のご冥福を心からお祈りいたします。

ところで、私が舞台の重造さんに初めて接したのは、上海事変のころ、文楽で「爆弾三勇士」を演じていた時で、確か盲人の七世豊竹駒太夫の相三味線を勤めておられた時でした。東大の三年生のころかと思います。当時はまだ文楽についての知識も浅い時であった上に、太夫や人形の方に心が集中していたので、三味線にまでは十分心が回りかねるころだったのです。重造さんとその三味線の印象は、残念ながら消えたようです。

国立劇場の調査養成課の依頼で、文楽引退後の重造さんの芸談の聞き役を勤めたことは、私にとってもありがたいことでした。それが『文楽の三味線』という書名で刊行され、重造さんの米寿祝賀演奏会（国立演芸場）に間に合ったことは、大きな喜びでした。

その聞き書きによって、改めて私は重造さんの偉さを知りました。芸ばかりでなく頭の良さを知りました。そして、この芸談によって、文楽の三味線ばかりでなく、文楽そのものについて、いろいろ貴重なことを教えて頂きました。重造さん、有り難うございました。

（合掌）

明治終り　小若太夫と政二郎の大いたずら

相談役　豊澤　猿三郎

其の頃、綾瀬太夫・亀造の一座に小若太夫政二郎という青年の一組が居ました。切三の柳適太夫が毎夜高座から下りると「白湯がぬるい、炭買う金が無いのか」と、其のボヤキが二人の青年の耳に入ったからいけません。猿之助（五世）に稽古を受けている二人は、其の稽古場で相談の結果、柳適太夫が始まると益子焼のすしやの湯呑の様な代え湯呑を、火鉢の真中の火の中へ埋めました。平瓦の次郎蔵の出の前で呑むので、いやがる箱屋（床世話）の国松にヤットコで挟んで出させて様子を見ました。やがて、高座でギャッという象の難産の様な声と共に、客席でキャーという狐が拷問にかけられている様な女の泣き声に開けてみますと、太夫は右手で耳を抑え、四ツん這いで舞台を這い廻り、前のお客は湯呑の当った下腹や股を抑え、痛いよ痛いよと泣く斗り。直に病院へ送り総立ちのお客さんは入れ掛け（入場無料）の券を差し上げ、閉場後の始末は、いたずらの二人には翌日から無給、ワリ（給金）は席亭の取り上げとなりました。小若太夫の父は太夫、母はよし町の一番の芸者故、小遣には不自由しませんが、政二郎は芸も面もよいのですが、一寸銀ながしな処があってもてません。いつも小若太夫が払っていました。二人は間もなく大阪へ参り、小若太夫は越代太夫、相生太夫、後は相生翁、政二郎は徳太郎、四世清六となり古靱太夫（山城少掾）の相三味線となり、共に大物と成られました。此の度も敬称を略させて頂きました。御退屈様でした。

次に私事で恐縮で有ります。人間八十八歳は一つの厄年で有りますので、逆に祝うのだというお話もございます。私も八十七歳迄は健康そのものでしたが、八十八歳と成って一度にガタが来て、春から入院、心不全、腎臓、脱水病、痛風と病気の問屋と成りました。其の為、五月二十日宮中の勲章伝達式にも出席出来ず、家内と伴の二人でお受けした次第でございます。よく勲章を戴くと亡くなる人が有ると申しますが、私と同日叙勲した大阪の某は、其の後間もなく亡くなり、私も間もなくかと病院暮しをして居ました。退院したり入院したり、八十八歳の一年も過ぎ、節分も過ぎました故、今年はもう厄落ししたのでしょう。病院へお越し頂いたのに面会謝絶の為、受付でお帰り願ったりの失礼をお詫び申します。本年に入り退院致しました。御親切なお見舞有難く、お礼やらお詫を申し上げます。ほんとうに有難う存じました。

第二回豊澤仙廣賞
―竹本綾一が受賞―

去る四月二十日、本牧亭公演席上にて、竹本綾一に第二回豊澤仙廣賞が授与されました。綾一は、昭和61年度に於ける本牧公演最多出演者であり、八王子車人形との数多くの共演、特に61年には海外公演にも参加する等の顕著な活動が認められたものです。授与式には、その前日に退院したばかりの豊澤仙廣保存会会長（協会前副会長）が馳けつけ、「この後とも綾一をご贔屓に」と挨拶。田辺会長からも「義太夫協会もいま多難な時、みんな一致協力してこれからの義太夫を再び隆盛にするよう邁進したい」と挨拶がありました。

〔受賞者略歴〕

竹本綾一（たけもとあやかず）
幼少より長唄を習う。昭和39年　三代目竹本綾之助に入門、竹本綾一となる。41年　NHK邦楽技能者育成会第10期卒業　44年　結婚等のため一時中断　48年　義太夫再開　55年　社団法人義太夫協会理事

勧進帳の舞台から　（撮影　佐藤　公夫氏）

〝勧進帳の段〟の成功に思う

相談役　池田弘一

女流義太夫による『勧進帳の段』が本牧亭で演奏されるのは今度が初めてである。女流の演奏によって、男の中の男ともいうべき弁慶がどのように描き出されるか、本年度の義太夫節保存会の公演は、これまでとは違った興趣を湧かせてくれる。

右のように景山正隆氏は三月二十一日公演の解説に述べられているが、そうしたおおかたの期待に十分に応えた演奏であったと私は考える。

太夫八名、三味線五名の演奏者が舞台せましとビッシリ並んだ形で幕が揚がった。それだけでも一種の迫力を感じさせた。そしてシンの役々のみならず、四天王のよかったこと。ツレを弾いた人たちの三味線にも明らかに訓練のあとが見えた。つまりワケロの少ない番卒や梶下を勤める人たちも大いに時間をかけ稽古に励んでくれたのである。その結果、弁慶・富樫・義経という役々も舞台の上に活然と現われてきて、それらの役を勤める人たちもそれぞれの格にふさわしい充実した演奏をなし得たのだと信ずる。

正直なところ、私はこの数年来、ある限られた人たちの芸に酔うためにのみ本牧亭に足を運んでいたように思う。その結果、若手の美女たちにはひそかに非行少女A・B……と名づけ、失礼な陰口をきいていたものである。

しかし、この〝勧進帳〟を聴いてからの私はその愚かを改めた。もとより長年に亘っての醸成を経て芳香をはなつ芸を尊ぶ思いにかわりがあろうはずはない。だがまことに残念なことながらその種の芸だけでは本牧亭公演は成り立たないのである。幸いにして非行少女は未知の何かを内に秘めて女流演奏者に育ちつつある。

ここでもうひとつほしいのは将来を考える人たちの協力と調和である。何々門下というわくをこえた協同作業、協同修業の大切さを〝勧進帳〟の成功の実績が教えてくれたように思う。ここで得たものを協会の財産としてはぐくんでもらいたい。

ところで弁慶の〝勧進帳読み上げ〟を聞いて気になったところがある。それは「しかるに去んじ寿永のころ、兵火のために焼亡し果んぬ」の「寿永」という年号である。源頼政の挙兵は治承四年（一一八〇）のことで、敗軍を追って平重衡が奈良を攻め、興福寺・東大寺を焼き、大仏の焼亡したのは同年十二月二十八日のことである。なお俊乗坊重源が東大寺大勧進の宣旨を賜わったのは翌年の養和元年八月。寿永三年（一一八四）には大仏の鋳造を終り、文治元年（一一八五）八月二十八日に開眼供養が執行されている。

謡曲「安宅」には「かほどの霊場の絶えなん事を悲しみて」とあるだけで、焼亡の時には触れていない。歌舞伎「勧進帳」では「去

んじ治承の頃焼亡し畢んぬ」としている。

どうやら「勧進帳の段」の「寿永」は単純な誤まりということのようだ。ただしそれが明治二十八年の初演の時以来のものなのか、伝承のうちに起こったものかは知りようがない。なにはともあれ、この「勧進帳の段」を協会の財産とする段階で訂正を加えるべきであろう。

ついでに言うならば例月の公演台本にも検討の目が必要であろう。それは必ずしも叙述されている事項や表現上の誤まりをあげつらえということではない。今日の上演に最もふさわしい抜き差しを行い、最も適切な上演台本を作成し、効果的な演奏を行うためのものである。抜くには抜くだけの理由があってのすることであり、その理由はしばしばその時代の好み・流行と深く関係する。時間の都合というだけではないはずだ。聴き手のニーズということを考えれば、昭和六十年代にふさわしい抜き差しもあってしかるべきであって、稽古場でのものをそのまま移動させてきた演奏にとどまってはいられまい。義太夫を稽古していない聴衆にわかる浄瑠璃を考えても習慣的な抜き差しには反省が加えられねばなるまい。芸の伝承のためにはいつも新鮮な目による検討が必要である。〝勧進帳〟でみせてくれた協力のすばらしさをこうした面にも及ぼしてほしい。

心身障害児のための第16回特別公演 収支決算報告

＜収入の部＞

会場募金箱（20・21日）	51,015円
当日入場料	25,500円
出演者扱切符代	72,000円
協会扱御寄附	302,200円
〈内　訳〉	
竹本土佐廣様	80,000円
豊澤　仙廣様	50,000円
池田　弘一様	30,000円
和田　　博様	20,000円
坂本　朝一様	15,000円
妣田　圭子様	15,000円
松尾　武市様	15,000円
佐野　俊三様	10,000円
菅　　邦夫様	10,000円
中村初波奈様	10,000円
横山　敏雄様	10,000円
内野アキコ様	5,000円
加藤　清政様	5,000円
佐伯　　勇様	5,000円
竹本扇太夫様	5,000円
中島　古平様	5,000円
渡辺　兼造様	5,000円
竹本駒之助様	3,200円
上原　　操様	3,000円
島村　和利様	1,000円
収入合計	450,715円

＜支出の部＞

心身障害児のための寄附金	200,000円
本牧亭席料他諸掛	86,000円
旅費・宿泊・交通費	51,390円
通信費	54,260円
床世話・荷上他	22,500円
総稽古諸経費	8,100円
諸雑費	28,465円
支出合計	450,715円
差引残高	0円

義太夫協会が社団法人になった翌年から始まったチャリティー公演は、回を重ねて16回、暮の〝忠臣蔵〟をチャリティー公演とするようになってからも早12回、皆様のおかげをもちまして今回は二十万円を心身障害児福祉に役立てて頂けることになりました。これは、社会福祉法人ＮＨＫ厚生文化事業団が有効に活用して下さいます。また、今回もプログラム・切符等の印刷一切は協会常任相談役の高野俊雄氏がおひきうけ下さいました。

第16回の御報告が遅れましたことをお詫びいたします。

尚、本年も12月20日（日）に開催の予定です。その折には、どうかよろしくお願い申し上げます。

レマン湖上で古靱・清六を聴く（投稿）

松橋正文

冒頭から私事で痛み入るが、五十年前の学生時代に、山登りに熱をあげた経験がある。退職後に長野県に閑居を構えているのも、山好きの為せる業である。日本の山は一応も二応も心得ているが、本物のアルプスを見たいと、この六月に細君携行でスキスへ行って来た。山を見るのが目的だから、ツアーは利用できない。好天を麓で根気よく待つ心算である。言葉の壁は、度胸で乗越すこととした。

幸いにも望外の好天に恵まれ、モンブラン（仏領）もマッターホルンもアイガー・ユングフラオもピラタスも順調に予定を消化して了い、おかげで数日の余猶を得た。

そこでジュネーブ市を観光し、そこからローザンヌ市まで、レマン湖を船遊びすることとした。特急なら三四十分の所を、三時間かけてのんびりしようという魂胆である。

日本出発の時に、婿さんが長旅で退屈でしょうとウォークマンを用立ててくれたので、義太夫のテープ数本を携行していた。ジュネーブを出航した船は東に向う。船尾の方には、高さ百四十米という大噴水越しにサンピエール大寺院の尖塔が聳えている。陽光は麗かで、風は心持よく、南の方には珍らしくモンブランの名前通りの白い秀麗な姿が望める。

思いついて、テープを取出し、ヘッドホンを耳に当てる。古靱・清六の堀川である。なにしろ音源は昭和七年録音のSPレコードからLPになおしたものの由。雑音も相当なもの。洋楽の人々はCDで候のディジタル録音のと素晴しい音源の恩恵を受けているのに、邦楽は哀れなものと嘆くが、聴き込んで行けば両名人の世界に引ずり込まれる。祝い諷うも声低にから後は清六の三味線が冴え渡る。

レマン湖の船上という思いもかけない環境で聴く堀川、いつしか涙を催していた。去年亡くなった重造が著書で、素朴に弾け、ということを強調している。（大阪弁で道楽に弾けと書いてあるが、東京育ちにはニュアンスが難しい。）たしかに、古靱も清六も素朴である。義太夫節の原点はこの通りと示しているように思えるが小生の一人よがりかしら。

漱石の「猫」の中で、苦沙弥先生の細君がお歳暮代りにと攝津大掾をねだる。演目は堀川だと云うと、堀川は三味線だけで身がないからいやだと苦沙弥先生が遁辞を弄する所がある。流石漱石で作品の中で、義太夫に造詣が深いことを随所に散見させている。

船は滑るようにレマン湖を進む。古靱は物堅く律気に語る。清六の気合の入った弦がリードする。身がない所か充実した両名人の至芸である。陽光は燦燦と注ぎ、湖水の涼風は頬を和かになでる。この不思議な調和!!

山が好きで、義太夫が好きで、本当に幸せと思った次第である。

（特別会員。長野県諏訪郡原村在住）

義太夫節三百年 基金募金 御報告

義太夫節三百年にあたって、会員各位ならびに関係者各位にお願いしておりました「三百年募金」について、第3回中間報告（36号）以降の動きを、大変おそくなりましたが御報告させて頂きます。（一口　五、〇〇〇円）

36号にて御報告した分（60年11月20日現在）　七五八口　三、七九〇、〇〇〇円

佐々木明郎様　（二〇口）
中村初波奈様　（一〇口）
早川　勉様　（六口）
景山　正隆様　（二口）

総計　七九六口　三、九八〇、〇〇〇円

これに利息が三九、八三九円つき、昭和62年8月末日現在　三、〇一九、八三九円となっております。どうも有難うございました。

尚、三百年募金にさきがけ、河野国声常任相談役より三百万円の御寄附を頂いたことは、会報31号（59年6月3日発行）で御報告したとおりです。改めて御礼申し上げます。

女義後援会発足

―女流義太夫本牧公演後援会―

発起人に高野俊雄・池田弘一両氏

酷寒の1月23日、女流義太夫関係者が本牧公演について考える集会をもちました。かねてお客さまより寄せられた御意見をもとに、番組の内容、財政・芸の質・宣伝等々について話し合い、最終的には、何としても二日間の本牧公演を守ろうと全員の気持が一致いたしました。

ひき続き1月30日、協会役員と、本牧公演にひとかたならぬ御声援をお寄せ下さる役員各位との意見交換の場が設けられました。その結果、左のような趣意書が作られ、それが発展して「女流義太夫本牧公演後援会」の発足となり今日に至っております。御報告が大変おそくなりましたが、改めて広くお知らせ申し上げ、併せて御理解・御協力をお願い申し上げる次第です。

趣意書

ようやく春らしい陽気の日が多くなってまいりました。ご機嫌よろしきこととお慶び申し上げます。

さて早速ながら、おりいって御力ぞえを仰ぎたいことがあって一筆認めました次第でございます。

お互いさま私どもは随分永いこと毎月二十日二十一日夜の女義演奏会を本牧亭で楽しんで参りました。ところがこのほど機会あって協会の会合に出席いたしまして運営の実態を聞きましたところ、毎月両日の公演によって一か月に二十万円余りもの赤字が出ているとのこと、このところ御承知の通り入場者の数はふえ、活況を呈しているように見えますが、規定の入場料を払ってのお客さまは微々たるものであることを、資料によって知り、びっくりいたしました。そのため役員・正会員もたびたび会合を開いて協議され、なかには二日の公演を一日にしてはという意見もあり、また一日は無給金でよいから二日の公演は守ってという意見もあるなど（備考・一日のお給金は、美容院に行ったら足代は持ち出しというのが実態なる由）、つまり私どもが楽しみにしております本牧亭での二日の公演が経済的理由からぐらついているありさまなのであります。

そこで、私考えますことは、抜本的な解決や義太夫協会将来の発展的運営策などに関しては、会長はじめ諸役員、正会員の努力・工夫にまつこととして、さしあたり毎月の公演で出る赤字の半分くらいは、長年なじんできた本牧亭女義演奏のために補ないをつけてあげたいということなのであります。

もとより微力の私一人にそれが出来ようはずもなく、またそうした出すぎた行為に出ますことにもきっとお叱りがあろうとも存じますが、あえて私は先人の故知にならい木戸をつみたいと考える次第なのであります。

くりかえして申しあげますが、これは本質的な解決につながるものでもなく、あるいは抜本的対策の妨げをなすものであろうやも知れません。

それでも私は、さしあたり全くさしあたり、この昭和六十二年の間だけでも正会員の皆さんが本牧亭の公演に限っては赤字の心配なく舞台をつとめられるように微力を尽くしたいと思うわけなのであります。

つきましては、あなた様におかれましても右の心情おくみとり下さいまして格別の御力ぞえを賜わりますよう謹んで御願い申し上げる次第でございます。

昭和六十二年三月二十日

発起人　高野　俊雄
　　池田　弘一
賛同者　河野　國声
　　松尾　武市

付記

具体的な方法といたしましては、一人が年間十万円木戸をつめば（余分な木戸銭を提供すれば）十人で百万円。このくらいあれば形がつこうかと思います。しかし一人あたりの金額も十万円にこだわるわけでもありませんし、人数についても特定するものではございません。多くの皆様のただただ御芳志にまかせるつもりでおります。

なお例月の二十日、二十一日本牧亭において御芳情をうけましたり、また御意見御質問をいただいたりいたしたく存じますので発起人、賛同者にお声をおかけ下さいますように。また右の者不在の折りは代理として事務局の水野さんを頼んでありますのでお話しおき下さい。

＊　＊　＊

昭和62年8月末日現在、左の通りとなっております。本当に有難うございました。

池田　弘一様（木戸料）（楽屋見舞）	一〇〇、〇〇〇円
吉川　英史様	一〇〇、〇〇〇円
河野　國声様	一〇〇、〇〇〇円
高野　俊雄様	一〇〇、〇〇〇円
竹本朝重御連中様有志	三〇、〇〇〇円
竹本駒之助御連中様有志	七〇、〇〇〇円
松尾　武市様	一〇〇、〇〇〇円
渡辺　兼佐様	三〇、〇〇〇円
合計	七三〇、〇〇〇円

義太夫教室第40期

演舞場スペース・アルファという最適の会場を得て、第40期は受講生が過去最高の54名で初級入門コースが始まりました。この9月1日からは、中級コースとなり、語り25名、三味線18名が受講中です。

初級入門コース　アンケートより

○はじめはついていけるかどうか心配でしたが、回を重ねるごとにできないながらも面白くなってきて、アッという間に二ヶ月が過ぎてしまいました。

○初めて〝野崎村〟の声を出した時と、最後の時の自分に自画自讃してしまいました。何もかも初めての体験に快い気持です。

○義太夫がこれ程新鮮で深味があり、人の心に食い込んでくるすばらしい芸術であることを今頃になって気付くとは！

○義太夫は勿論のこと、古典芸能全般についても大変おもしろく勉強させて頂いた。

○文楽にはなじみがあるものの〝素〟義太夫は初めて聞かせて頂いた。六・七月と涙涙で感激の舞台（編集部注・本牧亭）であった。

○国立劇場の文楽公演のときに置いてあったチラシを見て参加させて頂きました。義太夫という名前は聞いたことはありますが、どんなものか見当がつかず不安でしたが、教室のお蔭で文楽との関係もわかりました。

○とても楽しくて、下手ながらも自分で語ってみて、義太夫を聞く時、今まで以上に注意して聞くようになりました。

○普段し慣れないのでつらかったのですが、正座することに少し慣れました。

○前半の講義と違い後半の実習では少しも足がシビレなかったことをご報告します。

○思いがけず自分と同年齢の女性が多く、改めて義太夫の新しさというものを発見した感じです。三味線の実技をもっとやりたかったと思います。

○伝統を維持することは大切ですが、いま日本が大きく変ろうとしているのを肌で感ずるのにつけ、このままでよいのかしらという疑問もふと沸くことがあります。

お願い

ごくたまに、お頒けできる三味線が手に入ることがあります。お申込みの順にお頒けすることになりますので、御希望の方は事務局まで御連絡下さい。但、原則として、義太夫協会会員、義太夫教室出身者、現在稽古中の方に限ります。

バチ特にコマは払底といっていい状態です。義太夫教室受講生のように、若い義太夫志願者は次から次へと誕生いたしますので、道具類は常に補充が必要となります。三味線・バチ、特にコマを御提供下さる方がいらっしゃいましたらどうか御一報下さい。

協会の動き

昭和62年1月より
昭和62年9月まで

〔昭和六十二年〕

1月10日　資料・記録部会　於事務局
1月17日　資料・記録部会　於事務局
1月20日　義太夫協会公演会　於本牧亭
1月21日　教師のための義太夫講習会（文化庁助成）講演ー景山正隆、宇野小四郎　乙女文楽・桐竹智恵子、ひとみ座参加　於本牧亭
1月23日　本牧公演について、女流義太夫関係者の集会　於文明堂
1月30日　本牧公演について、協会役員と本牧亭御定連との懇談会　於文明堂
30日　新年会　於蓬莱閣
2月4日　公演部会　於芸団協
2月6日　故鶴澤重造師文楽協会葬　於青山斎場
2月8日　所沢こども劇場「八王子車人形の世界」　於所沢市民会館
2月11日　義太夫教室OB演奏会（義太夫教室OB会主催、義太夫協会後援）　於本牧亭
2月20日　普及部会　於はる乃
2月20・21日　第6回伝承者研修発表会（義太夫節保存会主催・義太夫協会後援）　於本牧亭
3月4日　公演部会　於芸団協
定例理事会　於芸団協
3月7日　学校巡演　於浅川中学校
3月8日　'87都民芸術フェスティバル　第17回邦楽演奏会　竹本土佐廣他女流が出演した。　於第一生命ホール
3月10日　昭和62年度民間芸術等振興費補助事業計画書提出
3月10・11日　第13回芸団協主催公演〝近松の世界〟実験劇場・復活一人遣い人形芝居「曽根崎心中・観音廻り」作曲・竹本弥乃太夫、人形・宇野小四郎、竹本弥乃太夫・鶴澤正一郎他出演　於国立小劇場
3月14日　学校巡演　於陵南中学校
3月17日　第8期竹本研修終了発表会（鳴物・歌舞伎俳優発表会と合同）　於国立小劇場
3月20日　義太夫協会公演会　鶴澤宏太郎の芸団協助成新人奨励賞表彰式　芸団協常任理事・松島庄十郎師より祝辞　竹本連中（歌舞伎義太夫）当公演に初出演　於本牧亭
3月21日　義太夫節保存会主催・義太夫協会後援〝弁慶ー五条橋・弁慶上使・勧進帳ー〟公演（昼夜）5頁参照　於本牧亭
3月23日　正会員団体懇談会　於芸団協
3月26日　義太夫節保存会　昭和61年度文化財保存事業実績報告書提出
3月27日　義太夫教室（文化庁助成）第39期終了　受講生に終了証を発行した。　於銀座三丁目東町会事務所
3月29日　鈴木一光氏追善浄瑠璃会（施主ー鈴木克子氏　協賛ー大日本素義会）東京の素義会の重鎮・一光氏を偲び正会員が多数出演。　於本牧亭
3月30日　第1期能楽、第8期竹本、第3期鳴物、第5期寄席囃子研修合同修了式　竹本では、中村信義（竹本東太夫）水藤寛（鶴澤信二郎）の二名が卒業した。　於国立小劇場

〔昭和六十二年度〕

4月1日　公演部会　於芸団協
4月7日　昭和61年度民間芸術等振興費補助金（青少年等芸術普及）実績報告書提出　於事務局
4月11日　資料・記録部会　於事務局
4月20・21日　義太夫協会公演会　20日は第二回豊澤仙廣賞授与式　竹本綾一が受賞した。（4頁参照）　於本牧亭
4月21日　正会員審査委員会　於本牧亭

4月27日　昭和62年度補助事業についてヒアリング　於文化庁会議室
4月27・28日　女流後継者育成事業　奥庭研修（野澤勝平改め野澤喜左衛門師指導）於国立劇場稽古場
4月30日　公演部会　於芸団協
　昭和61年度民間芸術等振興費補助金（青少年等芸術普及）の額の確定通知　二、七〇〇、〇〇〇円
5月6日　経理部会　於事務局
5月9日　資料・記録部会　於事務局
9日　昭和62年度民間芸術等振興費補助事業計画書（確定版）提出
9日　教師のための義太夫講習会「三味線を弾いてみませんか」1・2頁参照　於演舞場スペース・アルファ
5月12日　義太夫節保存会　昭和62年度文化財保存事業補助金交付申請書提出
5月15日　第9期竹本研修生選考試験　於国立演芸場　第一演芸研修室
5月17日　学校巡演　於八王子第五中学校
5月20・21日　義太夫協会公演会　於本牧亭
21日　第2期能楽（三役）・第12期文楽・第9期竹本・第4期鳴物・第6期寄席囃子研修合同開講式
5月22日　経理部会　於銀座三丁目東町会事務所
6月2日　義太夫教室第40期（初級入門コース）開講　54名が受講　於演舞場スペース・アルファ
6月3日　経理部会　於事務局
6月4日　公演部会　於芸団協
6月6日　女流後継者育成事業　草履打研修（豊竹呂大夫師指導）於国立劇場稽古場
6月8日　学校巡演　於東海大学
6月9日　芸団協第21回総会　朝重副会長・事務局出席　於京橋会館
6月9日　女流後継者育成事業　草履打研修（豊竹呂大夫師指導）
6月16日　昭和63年度補助事業概算予算提出　於国立劇場稽古場
6月17日　経理部会　於事務局
6月19日　協会問題緊急相談会　於演舞場スペース・アルファ
6月20日　教師のための義太夫講習会　於本牧亭
6月21日　義太夫協会公演会　於本牧亭
6月24日　常務理事会　於文明堂
6月26日　経理部会　於事務局
7月1日　定例理事会　於文明堂
7月2日　公演部会　於芸団協
7月11日　資料・記録部会　於錦輝宅
7月12日　義太夫協会通常総会　昭和61年度事業報告・収支決算報告、監査報告、昭和62年度事業計画・予算案を審議、原案どおり可決した。
7月15日　経理部会　於事務局
7月20・21日　義太夫協会公演会　於本牧亭
7月23日　公演部会　於芸団協
7月28日　義太夫教室第40期（初級入門コース）閉講式　皆勤13名、49名が所定の課程を終了した。　於演舞場スペース・アルファ
8月8日　経理部打合せ　於事務局
8日　資料・記録部会　於事務局
8月14日　運営特別委員会　於芸団協
14日　普及部会　於芸団協
8月20・21日　芸団協助成〝女流若手勉強会〟　於本牧亭
8月24日　昭和62年度民間芸術等振興費補助金額の内示　於文化庁
9月1日　義太夫教室第40期中級（語りコース・三味線コース）開講　於演舞場スペース・アルファ
9月3日　公演部会　於芸団協
9月13日　竹本土佐廣・春日とよ晴妙親子会（義太夫協会協賛・春日会後援）於日本橋三越劇場
9月　日　義太夫協会会報第40号発行

おわび

拝啓　時下ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。
さて、義太夫第40号の納期（九月十六日の予定）が当社の手違いによって大幅に遅れ、皆様に多大のご迷惑をおかけしましたことを心からおわび申しあげます。
今後、この様な事のないよう注意いたします。

〒105
東京都港区浜松町1-16-2
㈱とうこう印刷

住所等変更並びに'87名簿訂正

[redacted]

祖先祭御案内

東京の義太夫関係者は、初代竹本義太夫はじめ諸先輩方の功績に感謝する意味で、毎年一回「祖先祭」を行っております。

本年は左の要領にてとり行いますので会員の皆様、どうぞお誘い合せ御参加下さいますよう御案内申し上げます。

記

日時　昭和62年10月4日（日）
　　午前11時～午後2時

会場　両国回向院　電（六三四）七七七六
　　（総武線両国駅前　日大講堂隣り）

次第　＊本堂にて読経
　　＊初代竹本義太夫墓参
　　＊座敷にて昼食・懇親会

参加費　一、〇〇〇円

申込み　九月末日までに事務局へお申込み下さい。

（このところ十月十日・体育の日に定着しておりましたが、大日本素義会主催〝審査会〟が十・十一日両日に開催されることになりましたため、四日にくり上りました。御了承下さい。）

おめでとうございます

竹本（歌舞伎義太夫）に受賞あいつぐ

＊竹本　葵太夫さん

62年2月、昨年一年間に業績をあげた人たちに贈られる六十一年度芸術選奨の文部大臣新人賞〔演劇部門〕を受賞。3月25日、国立教育会館で授賞式が行われました。

＊豊澤　瑩緑師

62年4月、勲五等双光旭日章を受賞。5月14日、国立劇場で伝達式が行われました。永年の歌舞伎義太夫での活躍と、竹本研修生の実技指導（後進の指導）の実績に対する叙勲です。

＜寄　贈＞

テイチク株式会社　レコードと共に五十年
豊澤仙廣氏　豊竹呂昇三味線の添書及び袋　多数
須賀　一氏　本牧公演写真
国立劇場　国立劇場二十年の歩み　1冊
和田　博氏　じょうるり人生連載コピー他
後藤則一氏　三味線長袖　1ケ
室屋政弥氏　祖先祭本堂内写真　3葉
河野國声氏　竹本糸三師テープ　25本
床本　1冊（下段参照）
コピー本　1冊
床本　2冊
稽古本　9冊
SPレコード（良弁杉）11枚
谷川秀雄氏　竹本綾華師所蔵テープ　43本
同義太夫秘訣　1冊
芸団協　芸団協春秋二十年
株式会社グレートデン　極める（竹本土佐廣出演）ビデオ　3冊
女義の今昔他アルバム　1冊
竹本近衛太夫師御遺族様　床本　139冊
稽古本
肩衣・前かけ　各4枚
帯（以上スーツケース入）　2本
合引　1ケ
胴かけ　4ケ
仮見台（塗・木地）　2台
ヤッコバチ　2丁
胴板　2枚
ホソ用コマ　3ケ
三味線史等書籍　21冊
豊澤猿三郎師　五行本（豊澤猿蔵・鶴澤才七朱入り）他　35冊
駒　3ケ
根尾　7ケ
胴板　2枚
布四に使う琵琶の駒　2ケ
胡弓の駒　8ケ
生田流琴爪　1具
駒叩き・調子笛・ホソの撥各1
早大演劇博物館　演劇年報'87年版　1冊
川地稲子氏（故上杉桃子氏御遺族）
八世綱太夫全集　LP11枚組
文楽上演資料集・文楽公演プログラム・写真集他　多数
義太夫教室テキスト　多数

訃報

■鶴澤重造師（元監事・正会員・人形浄瑠璃文楽座三味線部代表）

62年1月2日逝去（1月5日、新宿区林光寺にて密葬、2月6日、青山斎場にて文楽協会葬が営まれました。吉川名誉会長の追悼文掲載、3頁）

■竹本糸三師（正会員）　62年2月23日逝去（少女の頃からの人気者で、大正天皇・大隈重信・渋沢栄一等々の前で演奏をしたことをなつかしそうに語っておられました。告別式では、河野國声常任相談役より、糸三師のテープ並びに、由緒ある床本が義太夫協会に寄贈されました。杉山其日庵が伊藤博文に贈ったところ、多忙のためか殆んど稽古せずにその床本は再び其日庵のもとへ。それが古靱太夫、相生太夫、糸三へと渡り、國声氏に渡り、義太夫協会へと寄贈されたものです。）

■井上一二氏（特別会員）62年7月3日逝去

編集後記

お正月以来、八ケ月以上も御無沙汰という新記録を樹立してしまいました。原稿をお寄せ下さった諸先生方、「会報はまだ？」と御心配下さった会員の皆様に大変申し訳なく、おわび申し上げる次第です。昨年末の名簿発行以降の御入会・変更の多さに、改めて月日を感じました。今年度中にあと二号、頑張りますので御意見・原稿等をよろしくお願いいたします。